〈研究短報〉

医療ソーシャルワークの経験が醸成するソーシャルワーク実践力の検証（第2報）

堀越由紀子[*1]・小原眞知子[*1]・稗田里香[*1]・内田敦子[*2]

Ⅰ．研究の目的と意義

1）研究背景

高齢化社会の進展をふまえ、近年の医療や福祉の状況は、病院で行われてきたケアを介護・福祉分野に移そうとする政策に導かれている。そのため、高齢や障害など医療分野以外の社会福祉実践においても“医療ニーズ”を有する人々への支援が拡大し、医療との交流が進んでいる。

こうした背景のもと、病院等の医療機関に医療ソーシャルワーカー（以下、MSWとする）として勤務した経験をもつ人材が、病院等医療機関以外の実践分野に移動して活躍する例が増えている。そこでは、MSWの職歴のなかで蓄積された経験知・実践知が、他の社会福祉分野で活用されている状況がうかがえる。

2）調査研究の目的

病院等医療機関以外の社会福祉実践分野に移動して働くMSW経験者の実践内容に着目し、医療との交流が進むこれからの社会福祉分野において求められるソーシャルワーク実践力を形成する道筋に関して示唆を得ることを目的に調査を行った。リサーチ・クエスチョンは「MSWの経験によって蓄積された実践知は、他の社会福祉分野においてどのように活用されているのか」である。

調査では、専門実践者の力量形成についてはコンピテンシーの概念を念頭においた。コンピテンシーは「我々が自分のために設定した目標を達成するために、これまでの経験を生かして、環境の中で効果的に対処したり適応していくこと」であり、「個人的な側面だけではなく社会環境や物理的環境の側面との相互作用の中で成長発達していく」と定義される（小原、1997）。

これを援用し、本研究では、MSWの経験が、各社会福祉分野で目標達成に向かうソーシャルワーカーの、効果的対処や適応に生かされ、環境との相互作用の中で《実践力量》となっているとの前提に立っている。

Ⅱ．研究対象と方法

1）調査対象

MSWの勤務経験を3年以上有し、他の社会福祉分野に移動した後、1年以上勤務している現任ソーシャルワーカー10名を機縁法で選定し、調査対象とした。その属性は以下の通りである。

・平均年齢　28.9歳（27歳～37歳）
・MSW経験年数　平均6.1年（3年～14年）
・移動後の社会福祉実践分野

行政機関：公的扶助CW	1人
行政機関：障害福祉担当SW	1人
行政機関：こども家庭SW	1人
高齢者福祉（介護保険）	2人
刑務所SW	1人
スクールSW	1人
社会福祉協議会（権利擁護）	1人

2）調査方法

半構造化面接法による個別インタビュー調査を実施した。

3）分析対象

インタビュー録音データを逐語記録に書き起こし、テキスト化した。そのうち、録音データに欠損がなく、追調査が可能な方8人分のデータを分析対象とした。

4）調査期間

調　査：2011年11月～2012年3月
追調査：2012年11月（3人）

＊1　東海大学健康科学部
＊2　東海大学病院総合相談室

2013年３月（２人）

５）分析方法

質的帰納的分析（持続的データ分析法）

６）倫理的配慮

研究は「社会福祉学会研究倫理指針」に則って計画実施した。研究手続きに関しては、東海大学健康科学部研究倫理委員会の承諾を得た。

調査の実施ならびに分析、結果の公開に際しては、対象者のプライバシー保護を徹底した。

７）インタビューガイド

インタビューガイドは「医療ソーシャルワークの経験が活かされていると感じることがありましたら、それはどんな時に、どんな場面で、どんな風になのかをお教え下さい」とした。

Ⅲ．分析の経過ならびに結果

１）１回目の分析

インタビューデータ全文を分節で切片化し、言葉の意味内容で分類してコード化し、カテゴリー化を試みた。しかし、インタビュー協力者の語りに“含まれている”要素が薄まった印象があり、協力者のフィードバックでも違和感を指摘された。そこで、手法を変更して再度分析を行った。

２）２回目の分析

インタビューデータから見出されたソーシャルワーカーとしての実践力量に関係する記録単位を、切片化せず発言ごとに抽出（413単位）し、これに対して、意味ある文章の抽出、コードの作成、カテゴリー作成の順序で質的帰納的分析の作業を実施した。作業に際しては、コンピテンシー構成要素として「価値・視点」「意欲・姿勢」「知識」「スキル」「実践特性」の領域を念頭においた。

３）分析結果

２回目の分析作業の結果、データは24の３次コード、８つのカテゴリーに集約された（図１）。

Ⅳ．考察とまとめ

MSW 経験者は、MSW 経験を医療以外の社会福祉分野の諸状況に適合させ、活用していた。

「知識」では、医学・医療、バイオ・サイコ・ソーシャルな人の把握、人と環境の理解の枠組みが、「スキル」では相談面接技術やアセスメントならびに連携のスキルが、「価値・視点」では当事者の尊重や自己実現の重視が、「意欲・姿勢」では実践への強い内発的動機づけが、応用され、これらの統合的活用が「実践特性」となっていた。

MSW としての経験知の活用には意識的、無意識的なものがあった。価値や視点は予め専門的自己に統合され、意識化されていなかった。MSW 経験で培ったとしても、普遍的な要素のため MSW 経験として意識化されてはいなかった。

これに対して、組織内での実践の足場構築、組織内外での連携作り、疾病や死への視野、面接への重点等は、

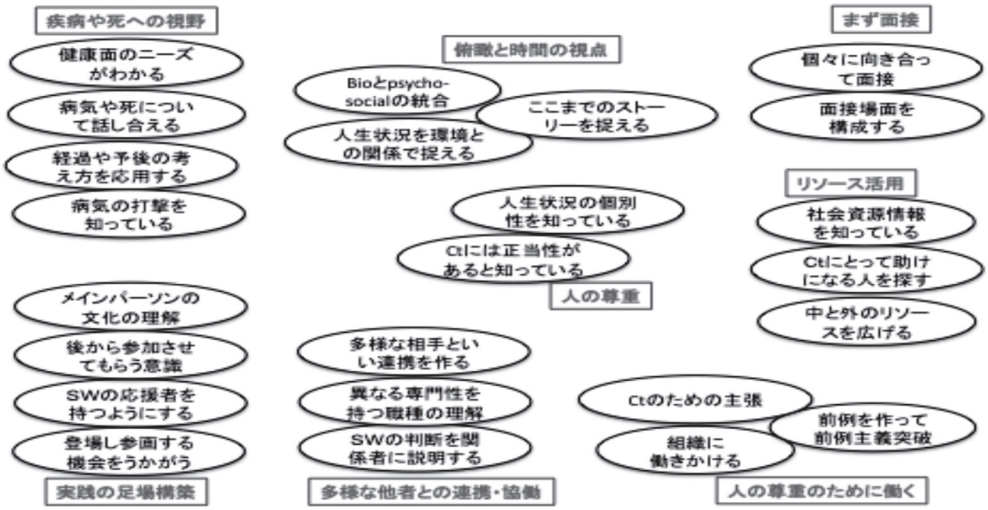

図１　分析の結果

ＭＳＷ経験では自明だったが、移動先の他分野では必ずしもそうではないために意識化され、再確認され、積極的に活用されていた。

これらの内容と体得経緯は、今後のソーシャルワーク人材育成に応用可能と考えられた。

Ⅴ．課題

MSW 経験の他分野における活用は把握できたが、分析データがまだ少ないため、調査対象を増やし、データの飽和化を図る必要がある。

参考文献

小原眞知子（1997）、「ソーシャルワーク実践の専門性に関する一考察：コンピテンス概念からの検討」、『社会福祉』38、日本女子大学社会福祉学科研究室.